

成島信遍年譜稿（二十六）

「キーワード」成島信遍、身延山久遠寺、日潮、身延山図經、北澤光昭

久保田 啓 一

本稿は、拙稿「成島信遍年譜稿（二十五）」（『鯉城往来』二二五号、二〇二三年一月三〇日。拙稿²⁵）の続稿である。以下、拙稿²⁵の年譜事項のみを挙げて続稿への橋渡しとする。便宜的な処置であるが、ご了解いただきたい。

「成島信遍年譜稿（二十五）」の事項

延享四年 丁卯 一七四七 五十九歳

（承前）

○ 冬、「神わざ」を清書して飛鳥山の金輪寺に納める。（静嘉堂文

庫蔵『神和佐 花見乃口遊等 合巻』他）

延享五年（寛延元年） 戊辰 一七四八 六十歳

○ 正月二十九日、御側衆巨勢伊豆守至信より御書物奉行桂山三郎左衛門への書物返却を取り次ぐ。（御書物方日記」第三十四冊）

○ 正月、服部南郭を訪問するも不在のため、七絶二首を残す。後に南郭より和詩を贈られる。（『南郭先生文集』四編）

○ 三月十八日、「富士の画記」（『全集』卷十一他）を記す。

○ 四月二十九日、御側衆巨勢伊豆守至信より御書物奉行近藤源次郎への書物返却を取り次ぐ。（御書物方日記」第三十四冊）

○ 六月十七日、「題琴台問查」（『韓館唱和編』所収）を撰文する。

△ 八月十五日、後に和鼎の養子となる北角勝雄出生。（国立公文

書館内閣文庫蔵『諸家系譜』）

○ 八月、「清間餘興叙」（『清間餘興』所収）を撰文する。

○ 秋、「汝が爺」（『全集』卷三）を記す。

△ 十月十日、和鼎、御鷹匠見習に召し出される。（『諸家系譜』）

○ 閏十月十八日、「庶物類纂」返却について、御書物奉行深見新兵衛と協議する。（御書物方日記」第三十五冊）

○ 十一月、「処世訓示蒙」（『芙蓉楼玉屑』所収）を著す。

成島信遍年譜稿（二十六）

寛保・延享年間補遺

寛保二年 壬戌 一七四二 五十四歳

○ 二月、身延山久遠寺の日潮より示された「延嶽図」に基づいて詠まれた「金粟館」以下の詩を編む。また、この頃、「延嶽図詩引」「題延嶽図奉謝日潮尊者惠祝」を作るか。（身延山久遠寺身延文庫蔵書画貼交屏風）

日蓮宗光徳寺（札幌市）住職北澤光昭氏著『身延山図経』の研究（「地人館」、一九九八年六月二五日。以下「本書」と称する）は、身延山久遠寺蔵版『身延山図経』（以下『図経』と称する）に関する初めての詳細な研究書である。可能な限り伝本を博搜してその比較検討に努め、複雑な成立状況を考察し、収録された詩文の作者を考証した上で、久遠寺の身延文庫に蔵される扇面の写本本文との対校を果すなど、厳密を極めた調査が展開される。これにより、信遍が久遠寺及び『図経』の成立に深く関与した事実が示された。信遍の事績が寛保・延享年間に跨り、一つ一つの項を年譜稿に断片として処々挿入するのが難しいため、補遺としてひとまとめに掲げるこ

ととした。奥書等で年代の特定が可能なものは立項するが、前後数年の幅を持たせて言及する場合もあることを、予めお断りしておきたい。なお、本書で指摘された事実を逐一引用するわけにもいかず、詳細については本書の参照をお願いする。そのための便宜として、本書の該当頁を掲げる。

版本『図経』が身延山三六世日潮入山後に編纂されたのは北澤氏の説かれる通りである（本書二八〇頁）。しかし、各伝本には刊記がなく、巻頭近くに逐次増補されていく、歴代住持に与えられた論旨の年記によって、およその印刷時期を知り得るに留まるといふ点で、書誌事項の確定は困難を極める。北澤氏によれば、第一次刊行は「三六世日潮入山の元文元年（一七三六）九月二五日以降、同師賜諭旨の寛保三年（一七四三）閏四月二二日以前の七年間」（本書二八〇頁）と推定されているが、少なくとも下巻には延享期成立の詩文が点在し、本書収録の上中下三巻三冊本の形態がどこまで遡り得るかは現時点では不明である。信遍が『図経』成立に関与したのは下巻（外題「身延山詩偈 下」、内題「身延山詩下巻」）の編纂からと見られ、ここに収められた詩文の成立時期と併せて考察する必要があるが、その際重要な手掛かりとなるのが、本書に付載される身延文庫蔵書画貼交屏風（以下、「屏風」と称する）の作品群（本書三九六頁以下に翻字と影印が掲げられる）である。これらに記載のある作者名や年記が『図経』では省かれたり異同を有したりするので、互いの参看が不可欠の作業となる。

まず、寛保二年に信遍が編んで身延山久遠寺に奉呈したと思われる四十首の詩題と作者名を、屏風の本文に従って掲げる。便宜上、通し番号を付した。題は「」に入れ、作者名が明記される場合は詩題の下に添える。なお、1から21までは五言絶句、22から40までは七言絶句となる。

- 1 「金粟館」 鳴鳳卿 2 「羅漢閣」 3 「鶯谷」 4 「無熱池」
 5 「摩尼嶺」 6 「白象岳」 鳴梅卿 7 「飛來峰」 8 「醍醐谷」
 9 「牛首徑」 坂達経 10 「月印橋」 11 「真如海」 12 「梅檀林」 阪信堅 13 「琥珀臺」 14 「寿星巖」 15 「羽衣橋」 邨芳充
 16 「不滅塔」 17 「延寿泉」 坂矩明 18 「返照館」 馬之白 19 「殯霞軒」 坂伊教 20 「法鼓樓」 長之義 21 「太平橋」 22 「重咏延嶽図中一境 朝陽洞 得水字」 鳴鳳卿 23 「又得香字」
 24 「忍辱巖 得声字」 25 「般若臺 得衣字」 鳴梅卿 26 「獅子松 得岑字」 27 「五雲峰 得峰字」 阪信堅 28 「鷹鳥岳 得微字」 29 「富士嵩 得深字」 坂伊教 30 「長舌泉 得峰字」
 長方義 31 「湧出村 得城字」 32 「白毫樓 得樓字」 邨芳充
 33 「菩提梯 得梯字」 34 「丹雀嶺 得飛字」 桐喬直 35 「說法石 得苔字」 36 「宝樹林 得林字」 坂達経 37 「蟠竜石 得臺字」 38 「切利門 得雄字」 39 「甘露門 得心字」 坂矩明
 40 「石門 得間字」 馬之白

以上の四十首の後ろに次の奥書がある。

寛保二年之春二月 東都中秘書少監鳴鳳卿揮筆芙蓉樓中燈火

之下 鳳卿

ここで改めて屏風の本文によって知り得る事実を確認しておきたい。

まず、末尾の奥書によって、信遍が四十首を取りまとめたのが寛保二年二月であったことが明らかとなった。なお、北澤氏は信遍奥書の「鳴鳳卿」の下の文字を「拝」と読む(本書四〇五頁)が、四一六頁の原本図版に拠れば「揮」である。

次に、版本『図経』では記されていないなかった作者名が屏風の本文では明記されている。具体的にいえば、版本では無記名であった6の鳴梅卿、12の阪信堅、32の邨芳充、そして36の坂達経の作者名が補われた。これによって、たとえば鳴鳳卿作は1〜5、鳴梅卿作は6〜8、坂達経作は9〜11、阪信堅作は12〜14、邨芳充作は15・16、坂矩明作は17、馬之白作は18、坂伊教作は19、長之義作は20・21のように、記名のある作から次の記名の前までの一連を同一人物の作と推測することが可能となった。北澤氏の作者推定はこの原則に依拠しており、首肯できる。なぜ版本『図経』の記名に不備が生じたかは不明であるが、四十首のうち、1〜5、22〜24の八首を信遍が作ったとの推定は成り立つと考えておく。

さらに北澤氏は、屏風に貼られた鳴鳳卿撰「延嶽図詩引」と「題延嶽図奉謝日潮尊者惠祝」以下の八首(作者は、鳴鳳卿、鳴梅卿、坂達経、邨芳充、桐喬直、長方義、坂以教、阪信堅の八名)も、紙高が同一であることから先掲の四十首とともに一卷を成していたで

あろうと推定し、同時期の成立と見なした（同書三〇〇頁）。版本『図経』では、八首の題は一首目が「題延岳図」で、二首目から七首目は「企」、八首目は「同」とあるのみ、作者名は三首目に「阪達経」、八首目に「阪信堅」と明記される他は無記名となっている、屏風の情報がなぜ版本に活かされなかったのか、疑問の残るところである。四十首の末尾の奥書に記された寛保二年二月が「延獄図詩引」以下の成立と直結するかどうかは厳密には確定できないが、北澤氏の推定に従い、同じ頃の成立として同項に含めることとした。

最後に、屏風及び版本『図経』下巻の主要部分を占める詩文の、信遍以外の作者たちについて言及しておく。北澤氏の「巻中・下の作品収録者略伝」（本書三〇二―三〇六頁）に考証が示されるが、信遍の伝記に即して考察すると、新たな要素を見出すことができるように思う。まず鳴梅卿が信遍嫡男の和鼎、坂伊教が信遍の門弟坂倉源次郎伊教（拙稿「成島信遍年譜稿（十八）」・「成島信遍年譜稿（十九）」。拙稿⑱・⑲）であることで、信遍が身近な知友・門弟に声をかけて作品を集めたという経緯が想定できよう。また、邨芳充・垣芳充と呼称される村垣芳充は、寛保二年当時は御広敷の添番を勤め、延享二年（一七四五）九月一日より西丸勤めとなる（『新訂寛政重修諸家譜』十九、一九八頁）。吉宗の退隠に伴う西丸への異動はまさに信遍と共通する（拙稿⑲参照）ので、芳充が信遍と好誼を結んでいたとの推定は可能だろう。さらに、上記の人々と信遍の関係を敷衍させれば、坂・阪姓の達経・信堅・矩明らも、伊教と同

じく金座に関わる坂倉家の人々かもしれない。現に金座の小判師坂倉九郎次は甥の伊教を通して信遍と文雅の交わりを持った（拙稿⑲）。

さらに、四十首や八首には含まれないが、版本『図経』下巻には、桂山義樹君華「身延山」七律や麦斎高融（屏風では「頤斎高融」。本書三〇四頁）「題身延山 次潮上人韻」七律の作が見える。桂山については北澤氏の考証はないが、この桂山は幕府の御書物奉行で信遍とも公務上の接点を多く有する桂山三郎左衛門（号彩巖）であり、高融は桂山三郎左衛門の同僚であった御書物奉行深見新兵衛（号有隣）と知られる。つまり、四十首や八首を核として、版本『図経』下巻全体にまで信遍の人脈は広く及んでいた可能性が高いということである。信遍の築き上げた公私の交遊圏には、さまざまな形で確かな位置を占める人々が存在する。彼らに声をかけ、身延山の名所を題とした五絶や、詩会において韻籤を選んで七絶を詠ませる。桂山や深見には別格という形で参加を求めたところがあるか。

なお、日潮と信遍の交友がいつのように始まったかは不明である。版本『図経』巻下には源鳳卿「奉送日潮上人還山歌」が掲載される（本書二五四―二五六頁）が、日潮が身延山久遠寺に入った後の成立としかいえず、屏風にも当該作は見られないので、日時を確定して年譜の一項に加えることができない。

以下、「延嶽図詩引」と信遍作「題延嶽図奉謝日潮尊者惠呪」一首、さらに四十首のうちの信遍作（推定含む）八首を、屏風の本文に依拠して掲げ、書き下しを付す。漢字は常用漢字を用いるのを原則とするが、「嶽」と「岳」、「燈」と「灯」、「軟」と「輓」、「岩」「崑」「岳」と「台」などは別体として書き分けた。なお、屏風本文内の訂正や版本『図経』との異同を注記して示すこととする。

延嶽図詩引

鳴鳳卿撰^①

居廬山而不知廬山者、古亦有焉。其俛仰而無遺焉者、無其人則無有乎爾。日潮尊者之在延嶽、豈翹俛仰之尽哉。窺図立伝、嶽之幅幘翳蒼邈倚之勝、祖師開闢之力、絜乎視諸掌也。臥遊乎、臥遊乎、覚形神俱往矣。吾儕抱匱匏瓜之繫、不能身遊于此。属者得尊者之呪、展之几上、飄々然有出塵之想焉。聊以暇日^②与二三兄弟題其全図、又各探其一境、使図有声。知、嶽之神秀自古有諸、乃待尊者著、則尊者之真眼及人者、復出紫霄真人之上乎哉。

廬山に居して廬山を知らざる者、古も亦た有り。其の俛仰して遺すこと無き者、其の人無きときは、則ち有ること無からん。日潮尊者の延嶽に在る、豈に翹だ俛仰の尽きぬるのみならんや。図を窺め、伝を立て、嶽の幅幘、翳蒼邈倚の勝、祖師開闢の力、絜乎として諸を掌に視るなり。臥遊か、臥遊か、形神俱

に往くことを覚ゆ。吾儕抱匱匏瓜の繫、身ら此に遊ぶこと能はず。属者尊者の呪を得て、之を几上に展べ、飄々然として出塵の想有り。聊か暇日を以て二三の兄弟と其の全図に題し、又た各其の一境を探りて、図をして有声ならしむ。知りぬ、嶽の神秀古より諸れ有り、乃ち尊者を待ちて著はるときは、則ち尊者の真眼人に及ぶ者、復かに紫霄真人の上に出るか、と。

題延嶽^④図奉謝日潮尊者惠呪

鳴鳳卿^⑤

| | |
|---------|-------------------|
| 蒼茫延嶽入新図 | 蒼茫たる延嶽新図に入る |
| 便見人間掌上珠 | 便ち見る人間掌上の珠 |
| 氣圧崑崙三萬里 | 氣は圧す崑崙三萬里 |
| 象呑輿地恒沙区 | 象は呑む輿地恒沙の区 |
| 香雲出岫秋常滿 | 香雲岫を出て秋常に滿ち |
| 明月懸空影自孤 | 明月空に懸りて影自ら孤なり |
| 總識山中多法雨 | 総て識る山中法雨多きことを |
| 因君纔得味生蘇 | 君に因りて纔かに生蘇を味ふを得たり |

金粟館 鳴鳳卿

| | |
|-------|----------|
| 金粟來儀処 | 金粟は來儀の処 |
| 雨花今尚香 | 雨花今尚ほ香ばし |
| 天風吹不尽 | 天風吹きて尽きず |
| 飛著羽人裳 | 飛著す羽人の裳 |

羅漢閣^⑧

声聞五百身

閣上儼羅列

想昔在靈山

瞻仰受記萌

鶯谷

鶯々似嘸迦

間関在幽谷

好音自鷓中

出谷遷喬木

無熱池

盛夏無炎熱

宝池玉作砂

人間氷雪日

水暖出芙蓉

摩尼嶺

掌上見摩尼

誰識遍天闕

遍照下方人

声聞五百の身

閣上儼として羅列す

想ふ昔靈山に在りて

瞻仰して記萌を受けしことを

鶯々嘸迦に似たり

間関として幽谷に在り

好音鷓中よりし

谷を出でて喬木に遷る

盛夏炎熱無し

宝池の玉砂と作る

人間氷雪の日

水暖かにして芙蓉を出す

掌上摩尼を見る

誰か識る天闕に逼らんと

遍く照らす下方の人

玲瓏作明月

玲瓏として明月と作る

重咏^⑨延嶽図中一境

朝陽洞 得水字 鳴鳳卿

山中山下白雲層

山中山下白雲層なり

洞裡神仙朝嚼冰^⑩

洞裡の神仙朝に冰を嚼む

手把金経迎日坐

手に金経を把りて日を迎へて坐し

夜将明月作龕燈

夜は明月を將つて龕燈と作る

又得香字

洞口遥聞菩薩香

洞口遥かに聞く菩薩香

摩尼嶺下彩雲長^⑪

摩尼嶺下彩雲長し

前峰飛上三竿影

前峰飛び上る三竿の影

疑是東方慧日光

疑ふらくは是れ東方慧日の光かと

忍辱巖^⑫ 得声字

妙相誰伝忍辱名

妙相誰か伝ふ忍辱の名

瑞雲香霧繞崑生^⑬

瑞雲香霧崑を繞りて生ず

天竜夜瀉青苔露

天竜夜瀉ぐ青苔の露

滴々総為柔輦声

滴々として総て柔輦の声を為す

注

(1) 鳴鳳卿撰——東都鳴鳳卿（図経）

- (2) 視諸掌也。臥遊乎、臥遊乎——ナシ（『図経』）
- (3) 暇日——晦日（本書の翻刻）
- (4) 嶽——岳（『図経』）
- (5) 奉謝日潮尊者惠貺 鳴鳳卿——ナシ（『図経』）
- (6) 見——看（『図経』）
- (7) 岫——軸（本書の翻刻・『図経』）
- (8) 閣——「松」を見消にして「閣」に改める
- (9) 咏——詠（『図経』）
- (10) 冰——氷（『図経』）
- (11) 摩——末（『図経』）
- (12) 巖——岩（『図経』）
- (13) 雲——雪（本書の翻刻）

延享元年 甲子 一七四四 五十六歳

○ 六月、日潮の要請により、「ふつほうそう」を一首の頭に置く六首と、「詠身延山三宝鳥長歌并反歌」を作るか。（身延山久遠寺 身延文庫蔵書画貼交屏風・版本『図経』）

版本『図経』巻下の末丁と奥付「法華宗門書堂 京都三条通烏丸 東江入町 書林 平楽寺村上勘兵衛」との間に、「寂妙居士敬白」と作者名を記した和歌六首と詞書、そして「詠身延山三宝鳥長歌并

返歌」が、二丁にわたって挿入されている（本書二六七～二七〇頁）。さらに、北澤氏により、身延文庫の書画貼交屏風の写本が紹介され、「ふつほうそう」六首の末尾に「延享改元之夏六月旬 寂妙居士敬白」との奥書があること、「詠身延山三宝鳥長歌并反歌」題の下に「信遍」と作者名が掲げられることが紹介された（図版は本書四〇六頁、翻刻は三九六～三九七頁に掲載）。「ふつほうそう」六首の詞書には、「ながきもみじかきをもそへて」（版本『図経』）奉呈した旨が記されるので、六首と長歌・反歌は一連の作として把握されなければならず、屏風の写本の記述に従えば、寂妙居士は即ち信遍を指すことになる（同書二九五頁）。この北澤氏による推測は誠に尤もという他はない。問題は、信遍の法号は寂然であり寂妙ではないという事実が存することである。信遍が寂然居士なる法号を使用し始めたのは、管見に入る限りでは延享二年（一七四五）夏の「真甫翁遺草の序」撰文からであった（拙稿¹⁹）。もし、寂然に先立つ法号として寂妙を使用したことが資料の裏付けを伴って確認されれば、北澤氏の推測に全面的に依拠できるのだが、現時点ではまだ確証が得られないため、断定を避ける。

屏風の写本本文は本書に翻刻されるので、本稿では版本『図経』の翻字を掲げることとする。写本本文や翻刻との異同は、これまでも同様注記して示す。適宜句読点・濁点などを補うのも従前通りである。

甲斐の国身延の山に、ことし仏法僧の鳥啼わたりしとなむ。日潮大とこ、是を偈となし伝へ給ひぬ。まことに大乘三宝のむねを揚えむにして、言々玉の響あり。大和歌につゞりよせてまいらすべきよしうけ給はるを、松の尾山の曙に聞もならぬものから、聊その名を首のかみにすへて、はへなきことの葉、又ながきもみじかきをもそへて、まいらせぬものならし。

寂妙居士敬白⁽³⁾

ふたつなきみのりの門になれのみやみつゝのたからと鳥の啼らん

つま木とりなつみ水汲む山中に鳥もみのりの声かはすらし
ほくゑこそなみの法にはすぐれたれみ山の鳥のあとふりし
世に

うへもなき法の誓を白雲⁽⁴⁾のかさなる山にすむとりの声
そばちぬる露わけ衣きく人に山路のとりもなれつゝや啼
うき世をばよそなる山の松風に声をあはせて仏法僧鳴⁽⁵⁾

詠身延山三宝鳥長歌并返歌⁽⁶⁾

むかしへや 耆闍崛山に すむ月の 妙なるひかり
さしそへて 匂へる花も ひるがへり こがねの言葉
玉のこゑ しらべあはせし よはのかぜ 吹つくしたる
法の庭 みのるこのみを しるしをき かりに影こそ

かくれけれ さてともし火の ほのぐくと 世々に照して
行みちの 三の車の われ人に おもひの家を
出しめて もとつねがひを かなへしや うつほにあらぬ
うつせみの むなしきからと たれかみむ 花よもみぢよ
月雪も みな誠なる すがたぞと 一つのみちの
玉くしげ ふたみにあらぬ 教こそ かけごに塵も
すへざりし そのたらちねの こゝろには いたらぬ隅も
あらじかし あまねく潤ふ 法のあめ うへる草木は
かはれども 同じ恵の 世にみちて 味ふかき
あまつ露 そぐ心の すゞしさや 玉の臺に
楼たかく あらはれ出し そのかげに 迦陵頻吠の
声もなを 五百重の浪の 立つゞく その海原の
いろくずに 及ぶめぐみぞ たぐひなき 浜の真砂の
かぎりなき いのちのほとけ ましませる よつゝの洲さきに
とぶとりの 金のつばさ うち羽ぶき 南にめぐる
日のもとの 治りなびく 時津かぜ 浪こゝもとに
うまれあふ みぶの山は かいがねの さやにもみへぬ
雲間より このごろなる 鳥すらも 三つの宝の
こゑ立て、 法のをしへを さえづると はるかに聞も
たのもしき ひじりの住る ゆへならん これを思へば
ことの葉の しげるはやしの 木がくれに むかしも常に
ありけりと 室の扉に 聞わけて 伝ふる人や⁽⁷⁾

なかりけむ 衣の珠の かずならぬ 蚤の仕わざに
もしほ草 かきつむ筆も うまるべき 同じ蓮の
えにしならなむ

反歌

山ふかみ行ばみりのりのかいあれや仏法僧啼声をともにて

注

- (1) むねを——むね(屏風)
- (2) よせて——よせ(屏風)
- (3) 寂妙居士敬白——ナシ(屏風)
- (4) 白雲——白雪(本書の翻刻)
- (5) 屏風では、この歌の後に次の奥書がある。
延享改元之夏六月旬 寂妙居士敬白
- (6) 返歌——反歌(屏風)。また、屏風では、この題の下に
「信遍」とある。
- (7) 室——宝(本書の翻刻)
- (8) みりのり——のり(屏風)

なお、版本『図経』巻下所収の日潮「三宝鳥并引」の冒頭に、
今茲甲子孟夏朔三宝鳥出鳴

の一節がある(二六一頁)。延享元年四月朔日に身延山で仏法僧が
鳴き、それを奇瑞とした日潮が信遍に詠歌を依頼したとすれば、六

月の奉呈は時間的にも無理がない。「寂妙」の使用例を求めつつ、
年譜事項としての確定を期したい。

(未完)

〔付記〕 本稿を成すに当たっては、北澤光昭氏『身延山図経』

の研究』に専ら依拠した。北澤氏から頂戴した学恩に深く
感謝したい。

なお、本稿は、令和五年度科学研究費補助金基盤研究
(C)「成島信遍研究—幕臣文人の事績を通して見る近世中
期江戸文壇の特徴—」による研究成果の一部である。

A Chronological Record of Narushima Nobuyuki's Career (26)

Keiichi KUBOTA

In my previous paper, I serially recorded Narushima Nobuyuki's career from 1689 to 1748. This paper presents a detailed account of the articles provided to him in 1742 and 1744, as addenda.

Nobuyuki kept up a pleasant friendship with Nittyou, the chief priest of the Minobusan-Kuonji temple. Nobuyuki presented classical Chinese poems on famous scenic in Kuonji temple, and Waka of celebration.